The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	石化した身体と痛みの持続 ： 『哲学探究』二八三節・二八八節
Author(s)	丸田, 健
Citation	年報人間科学. 1998, 19, p. 183-198
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5452
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

石化した身体と痛みの持続

――『哲学探究』二八三節・二八八節

丸田　健

〈要旨〉

『哲学探究』二八三節には以下の想定がある――「恐ろしい痛みを感じ、それが続いている間に私は石になってしまう……まったく、自分が石になったかどうか、目を閉じていればどうして分かろう？」ノーマン・マルコムによれば、この想定は、痛みと振る舞いの間の論理的関係の否定の表現であり、それ故、論駁の必要がある。ところが、痛みの一人称帰属は観察に基づかぬため、石は行動的基準を満たさないという三人称的理由によっては、この想定は論駁されない。だがマルコムは、ヴィトゲンシュタインは別の仕方でこの想定の批判に成功しているのだ、と考える。本稿では、このマルコムの主張を『哲学探究』を参照しつつ検討したい。本稿では以下の指摘がなされよう。（1）『探究』二八三節において石の想定が論駁されているとすることは、痛みの一人称帰属の問題と三人称帰属の問題を混同することである。（2）『探究』二八八節において石の想定が論駁されているとすることは、強い意味での振る舞いの消去と弱い意味での振る舞いの消去を混同することである。（3）『探究』において石の想定が論駁されているとすることは、痛みの自己帰属の学習と自己帰属の実践を混同することである。結局のところ、ヴィトゲンシュタインの主眼は、石の想定を論駁することにはなかったのだ。またこの想定が、我々の想像力に訴えかけるのは、これが心的概念の自己帰属の論理を捉えているからにほかならない、と思われる。

キーワード

ヴィトゲンシュタイン

マルコム

一人称・三人称

心的概念

振る舞い

1. 導入

ヴィトゲンシュタインの『哲学探究』に、次のような箇所が登場する。「恐ろしい痛みを感じ、それが続いている間に私は石になってしまう――という想像はできないか？まったく、自分が石になっていないかどうか、目を閉じていればどうして分かろう？（二八三節）[1]」

この種の想定は、哲学史上、決して特異なものではない。例えば、関連してデカルトが想起されうる。[2] 後者によれば、心と身体は互いに独立に存在する実体であった。「私をして私たらしめているところの「精神」は、物体から全然分かたれているものであり……たとえ物体が存在せぬとしても、精神は、それがあるところのものであることをやめないであろう。[3]」したがってデカルトの場合、私の身体が無機的存在に変化するどころか、まったく存在しなくなるとしても、私は依然として痛み続けることが可能なのだ。

私の身体が消滅するにせよ、石になるにせよ――あるいはまた毒虫に変身するにせよ――以上のような想定は、何か我々の想像力に訴えかける力を持っている。つまり気が付かぬ間に私の身体に異変が起きていようと、そのとき私が依然として痛いと思っているならば、私はやはり痛み続けている――こう考えることは一見したところ、意味をなすように感じられるのである。

ある種の経験的事実も、この想定に貢献するかもしれない。つまり、四肢を切断された人がもはや存在しないそれらの身体的部位に痛みを感じる、という医学的事実がしばしば耳にされる。これを自分自身に当てはめて考えるなら、極めて異様な感じがする。つまり痛んでいる私の手が、そして当然存在するとしか感じられない自分の手が、目を開けてみれば、存在していない！――このようなことが可能だというのだ。だがこういった体験をいったん認めれば、例えば腹部に痛みを感じつつも、目を開けてみれば、そこが消えている、あるいは石になっている――だが私は依然としてそこが痛い――という体験も、想像しやすい。またSFにありそうだが、全身が失われ、特種な培養液に私の脳だけが浸かっている――だが私は、あると思っている身体に痛みを感じる――という状況も想像可能だろう。さらには、私は痛いにもかかわらず、私の脳までも石になっていたり、消滅していたりする、ということも、想像できないだろうか。（現に今、自分の頭には石が入っていないかどうか、私は目で見たわけではないのだから。）

いずれにせよ、私の身体が実際に石に変わったりするかどうかの科学的可能性が重要なのでは、もちろんない。私が本稿で問題にしたいのは、以下のことである。我々の想像力をとらえてしまう冒頭の想定は、概念的には一体何を意味しているのだろうか。一見意味をなすこの想定は、果たして本当に意味をなすのか。あるいは無意味なものとして言語から追放されるべきだろうか。仮に追放されないのなら、それはいかなる理由によってそうなのか。逆に追放されるべきなら、それはいかなる理由によってそうなのか。

2. マルコムの場合

マルコム（Norman Malcolm）は、先に引用した『探究』二八三節の想定を主題的に取り上げて論じている。[4] そこでまず我々の考察の手がかりを得るために、この想定に対するマルコムの考えの概略を踏まえることから作業を始めたい。

彼は、この想定は自己反駁的だという見通しを持って、考察に入る――「この空想は奇妙なだけではない――これは矛盾しているのだ。[5]」なぜなら、私が石になれば私はもはや生き物でなく、また私が痛みを感じるなら私はまだ生き物なのだから。このようにマルコムの考えはすでに、石の想定は我々の言語に位置を持ってはならない、という方向に傾いている。

ではこの想定の作者であるヴィトゲンシュタインは、いかなる意図で、この想定に言及したのか。この問題に対するマルコムの基本的スタンスは明瞭である。マルコムの論文全体で繰り返し指摘されることだが、根本問題と見なされるべきは、〝痛みの概念と痛みの自然な表出の間には論理的関係があるのかどうか〟である。ヴィトゲンシュタインは「ある」と考える。そしてマルコムによれば、私が痛みつつも石になるという想定は、ヴィトゲンシュタインのこの主張のアンチテーゼの役割を担っている。彼が言うには、石の想定は、「通常、感覚や意識を示すところの人間の行動――それが実際の行動であれ、潜在的行動であれ――を完全に消去するための、ヴィトゲンシュタインの装置[6]」である。そして私が石になっても痛みが持続するという想定は、「生きている人間の行動は「痛み」という語の意味とは何の関係もない、という考えを捉えている[7]」とされる。石になる想定が、そのような考えを表すものだとすれば、それは否定されねばならない。それを否定することで、ヴィトゲンシュタインは、心的概念と人間の振る舞いとの論理的連関を主張し通すことができるのだ。――以上がマルコムの展望である。

マルコムはまず、「痛み」や「怒り」といった心的語句の「私的直示的定義」という考えを一通り批判し、これらの語の使用には行動的基準があるという事実を指摘した上で、石の想定に戻ってくる。そして石になる想定が一人称的観点から書かれていることの重要性を、いみじくも指摘する。つまり他人が痛みを感じつつ石になる場合、彼の痛みが続いているという想定は、それほど魅力があるものではない。「痛み」の適用に行動的基準があるという事実が指摘された後では、石に痛みを帰属させることは、痛みの概念の適用基準に対する単なる違反でしかないからだ。それは容易に反駁可能なのだ。

しかし想定が一人称的観点から描かれる場合は、事情が異なる。マルコムの言葉を掲げておこう。「私が石になっても痛みを感じているという想定は、〝そんなことになれば、私が痛んでいるのかどうかを決めるために、私が利用する基準が適用されなくなってしまう〟という理由で退けることはできない。というのも私は、自分の場合にはいかなる基準も用いないからだ。[8]」我々は、自分に痛みを

帰属するとき、自分が行動的基準を満たしているか否かを確認した上でそうするのではない。つまり私が痛みの表出を持たない石であろうとなかろうと、一人称的観点から見れば、そのようなことは私の痛みとは差し当たり関係がないのである。私は表出を観察して、「痛い」と言うのでないからだ。この理由により、三人称で描かれた石の想定と同じ仕方では、一人称で描かれた石の想定は否定できない。かくしてこの想定は「見たところ」現実味を帯びる。そしてマルコムによれば、この想定が認められるなら、感覚の行動的表出は「感覚」という語の意味とは無関係である、という考えが支持されることになってしまうのだ。

この「難局 impasse」に対し、マルコムは『探究』二八八節の最終段落を手がかりにして、解決を試みる。[9] マルコムは、馴染み深い二五八節の感覚日記の議論を二八八節に結び付けることで石の一人称的想定が論駁できる、という方向に進む。細かな説明は省くが、マルコムが踏む手順は以下の通りである。既述のように、マルコムは、私が石になり痛みが続くという想定は、痛みの概念と振る舞いの間に本質的関係があることを否定するものだと考える。つまり石の想定を認めることは行動的基準を不要なものとして捨て去ることだ、と考えるのである。(1) 石化の想定に対するマルコムの第一の指摘は、次のものである。私から振る舞いが消去されようと、私が痛いと思うなら私は痛いのだ、というのであれば、「心的用語の使用にはいかなる基準もないということ、したがってそれらの適用には正しさや誤りもなくなるということ、が帰結する。このことは心的用語を無意味なものとしてしまう。」[10] つまり私が思っている自己帰属がなんであれ正しいのなら、それは無意味である、というあの有名な考えである。(2) したがって「なにかが〜であるという私の印象と、それが実際〜であることの間の必要な区別を設けるために、私は基準を、つまり私の印象の正しさをチェックするための物差しや標準を、利用しなければならなくなる[11]（強調、筆者追加）。」しかし、そうなると今度は、私が痛いと思っているにもかかわらず、自己確認してみたところ私は実は痛くなかった、という事態も認めざるを得なくなる。これは不可解な事態である。したがって私が石になろうと痛みは続くという最初の想定が否定されるべきだ、と結論づけられるのである。

3. 『哲学探究』読解

以上のように、マルコムによれば、痛みを感じながらも石になるという想定にヴィトゲンシュタインが言及したのは、痛みの概念が痛みの行動と密接な関係にあることを示すためである。そして石の想定を認めることは、痛みの概念と痛みの表出行動の論理的独立を主張することだとされた。よってこの想定は、排除されるべきなのである。

だがマルコムの主張は果たして正しいのか？あるいはどの程度、正しいのか？ヴィトゲンシュタインは、『探究』二八三節と二八八節の二カ所において、石の想定に触れている。そこでこの二節を参

照しつつ、マルコムの論点を当否を検討しよう。あらかじめ私見の方向を述べておくならば、ヴィトゲンシュタインは、少なくともマルコムが主張する仕方で石の想定に批判を加えたのではなかった。そもそもヴィトゲンシュタイン自身の関心は、この想定の論駁にあったとは思えないのである。

3－1．『探究』では、石の想定は、二八三節で初めて登場する。以下にこれを引用するが、後の便宜のために、各段落ごとにアルファベット記号を印しておく。

（a）存在者 Wesen つまり対象物に感覚がありうる――どうやって我々は、こんなことを思い付くことさえできたのか？

（b）私は教育の結果、自分の内の感覚に注意を向け、そして「そうして得られた感覚の」観念を、私の外部にある物体に移すようになったのか？他人の言語使用と矛盾することなく、自分が「痛み」と呼べる何かが（自分の中に）あることに私は気づくのか？――石や植物などには、私はこの観念を移すことはない。

次の段落で、私が痛みつつ石に変じる本稿冒頭の想定が登場し、その続きは以下のようになる。

（c）……――もしそうなれば、どんな点で石が痛みを持つ haben ことができるのか？どんな点で、石について、そんなことが言えるのか？まったく、そもそもなぜここで、痛みに所有者 Träger が必要なのか？！

（d）石が心を持って habe おり、その心が痛みを持って hat いるのだ――こうは言えるか？心にしろ、痛みにしろ、石と何の関係があるのか？

（e）人間のように振る舞うものについてのみ、それが痛みを持って *hat* いると言えるのだ。

（f）というのも、そういったことは、身体について言うことになっているのだから。あるいは身体が持って *hat* いる心について、でもいいが。で、身体はいかにして心を持て *hat* る、というのか？（二八三節）

さて、この節のポイントはなにか？そしてこの箇所で、石になる想定はいかなる役割を果たしているのか？まず確認しておくべきは、二八三節では、痛みの他者帰属・三人称帰属が主題だということである。この点は、なにより（a）から、読み取ることができる（また前後節も参照）。つまり「デカルト主義」[12]的思考からは、次のような疑問が生じる。「我々は他人の意識状態を直接体験することはできない。我々が他者について知覚できるのは、彼らの身体的側面だけだからだ。だが、それにもかかわらず、我々は痛みのような心的概念を他人（の身体）に当てはめる。これは何故か？」このように、問題は痛みの他者帰属なのである。

この疑問に対する一つの反応が、（b）で示されている。それに

よれば、痛みとは各人の「内部」に見つかるものであり、それは名前が付与できるような、いわば一種の対象だとされる。そして私が他人に痛みを帰属させるということは、私が持っている内的対象が他人の身体の中にも存在すると、私が思うことなのである。だが新たな疑問が生じる。もし痛みの三人称帰属というものが、自分の内部に存在する内的対象を、単に他人の身体の内部へ移転させることとして説明されるなら、他人の身体以外に、石などの物体にも移転可能にならないか。

ここでヴィトゲンシュタインは、この一見奇抜な可能性にもっともらしさを与える論法を登場させ、（b）で提案された痛みの三人称帰属の論理を極端化させる。石の想定が登場するのは、この目的のためである。つまり、内的対象を石に帰属させることは実に簡単だ、なぜならこの私が痛みつつ石に変化する場合を想像すればよいのだから、というわけである。しかし二八三節で一人称的想定が効いているのは、石への痛みの帰属に対しなにがしかのもっともらしさが与えられる、この一瞬でしかない。というのも、私が痛みつつ石になるという一人称的想定が終わるやいなや、問題は三人称帰属に戻っているからだ。つまり――「もしそうなれば、どんな点で石が痛みを持つことができるのか？」

かくして二八三節の残り（c）－（f）で検討されるのは、「石が痛みを持つ」という三人称帰属の言明である。そしてこの言明に対するヴィトゲンシュタインの指摘は、二点に整理できる。（1）一つは、「石が痛みを持つ」の「石が……」の部分に関するものであり、（2）他方は「……持つ」の部分に関するものである。（2）の方は、派生的な論点だと思われる。

（1）について。石に痛みがあるとはどういうことか？まず石に心があり、その心に痛みがある、ということか？この問いに対するヴィトゲンシュタインの答えは、（e）にある。そしてこの答えは、既に二節前の二八一節で指摘された、三人称帰属の文法の実質的再確認となっている。

> ……生きている人間もしくはそれに似ているもの（似た振る舞いをするもの）についてのみ、それが感覚を持つ、それが何かを見る、盲目である、何かを聞く、耳が聞こえない、意識がある、意識を失っている、と言えるのだ。（二八一節）

これと同内容である二八三節（e）では、ヴィトゲンシュタインの後期哲学に特徴的な手法が用いられている。つまり〝石に痛みがあることは可能か〟という一見形而上学的な問いが、〝「石に痛みがある」という文は、日常言語で言明可能か〟という言語使用上の文法的問題として扱われるのである。そして後者の形で表された問いに対するヴィトゲンシュタインの答えは、「否」となる。痛みの三人称帰属の論理の規定上、痛みは人間およびそれに類するものにのみ適用可能な概念なのだ。そしてこの理由により否定されるのは、「石に痛みがある」という三人称帰属の命題なのである。[13]

（2）について。痛みの所有者Trägerという考えへの言及、お

よび「持つ」という語に対する強調から、（c）－（f）でヴィトゲンシュタインの念頭にあるのは、痛みの「所有説」だと思われる。彼はこれを批判するのだが、それにしてもなぜ「痛みの所有説」という考えが突如登場する必要があるのか？だがこの説は実は、萌芽的に二八三節（b）で見られたものである。（b）では、痛みは自分の内部にある一種の対象だと考えられているからである。この考えからすれば、外的対象である椅子や鞄を持つのと類比的に、人は内的対象である痛みを持つ、つまり所有することになろう。また他人が痛いということは、私が痛いときに私が持っている内的対象を、私でなく他人が持っているということになろう。こう解釈するなら、ヴィトゲンシュタインが（c）において、「そもそもなぜ痛みに対して所有者という考えを当てるのか」と尋ねるのは、以上のような痛みの所有説が念頭にあったからなのである。

所有者・所有物という考え方を回避するため、ヴィトゲンシュタインは再度、問題を言語使用上の文法に帰着させる方策をとる。問題は、石が痛みを持つことであった。だがここで、何が何を「持つ」のかというように、所有概念に拘泥する形で考えることでは、問題は解決しない。むしろ人間のように振る舞うものについてのみ、それが痛みを持っていると言うのだという、言語使用上の事実に気付けば十分なのである。「痛みを持っている」という表現は、身体つまり人間のように振る舞うものについて適用されるものだからだ。もちろん、この表現は、身体が持っている心について適用されるのだと言うこともできよう。しかし、その場合の「持っている」とはどういうことか？もちろん答えはこうでなければならない――人間のように振る舞うものについてのみ、それが心を持っていると言えるのだ。それもまた言語的慣習の問題なのである。

さてマルコムによれば、我々の目下の関心は〝痛みの概念に対し、人間の振る舞いは密接な関係を持つ〟という主張の文脈に位置づけられるべきであった。この指摘は、二八三節に関しては的を得ていることが分かる。というのも二八三節の重要なポイントは、痛みは人間のように振る舞うものにのみ帰属できるという、痛みの三人称帰属の論理を確認することであったから。痛みの他者帰属において、痛みの振る舞いは本質的役割を担うのである。

だがマルコムのさらなる主張は、私が石になり痛みが続くという想定が意味をなすならば、痛みの概念と痛みの表出の論理的関係が否定されることになる、というものだった。したがって、この想像は不可能であるべきなのだ。この論点は、二八三節といかなる関連を持つか？

「自分が気づかぬ間に石になっていようと、私の痛みは続いている」――これは痛みの一人称帰属の言明である。他方、「この石には痛みがある」――これは痛みの三人称帰属の言明である。そして二つの言明の使用では、それぞれ異なる論理がはたらいている。つまり人間のように振る舞わない石に対し、痛みを帰属させることは文法違反である。だが、私が石になろうと私の痛みは続くという想定において、私の痛みの自己帰属は、一人称帰属の論理に違反しているのではない。なぜなら私は、身体的基準に照らして痛みを自己

帰属するのではないからだ。石が痛みを感じるという三人称的仮定は三人称帰属の行動的基準に照らして論駁可能だが、それは一人称的観点に立った石の想定の論駁を意味しない。「石になっているかもしれないが私の痛みは続く」と「この石には痛みがある」が異なる観点からの言明であり、そこでは異なる論理がはたらいているなら、（両者はどこかでつながりを持つにせよ、）一方の否定は他方の否定に少なくとも直結はしないからだ。マルコムの指摘するとおり、だからこそ三人称帰属では生じない「困難」が、一人称の想定で生じたのだ。たしかにヴィトゲンシュタインはこの節で、三人称的想定を否定している。だが、それは一人称的想定の否定と同じではないのである。

以上の議論をまとめておこう。石の一人称的想定は二八三節で否定されているとは言えない。否定されているとすることは、一人称帰属の問題と三人称帰属の問題を混同することである。そしてマルコム自身も、石の想定が二八三節で否定されているとは考えていない。彼は、石の想定の否定は次に検討される二八八節まで引き延ばされている、と捉えている。

3－2. 私が痛みつつ石になる想定は、『探究』二八三節より数節後、二八八節で再び取り上げられる。まずは、内容を確認しよう。

（a）私は石に変わり、引き続き痛みを感じる。――仮に私が間違っており、それはもはや痛みでないとすれば！――しかしここで誤れるはずはない、自分が痛いのかどうか、疑うことは意味をなさない！――つまり、もし誰かが「私が感じているのが痛みなのか、何か別のものなのか、分からない」と言うなら、我々は、彼は「痛み」という日本語が分からないのだと思い、それを彼に説明するだろう。――どうやって？おそらく身振りによって。あるいは針で彼をつつき、「ほら、これが痛みだ」と言うことによって。他のすべての説明同様、彼はこの説明を正しく理解したり、誤って理解したり、全く理解しなかったりする。そのいずれであるかは、他の場合同様、彼の語の使用に現れるだろう。

（b）彼が例えば次のように言うとする。「もちろん私は「痛み」の意味は知っているよ。だが私がいまここで感じているこれが痛みかどうか、これが分からないのだ。」――このときには我々は首を振るしかなく、彼の言葉は、どう扱うべきか分からない奇妙な反応だと見なされる他ない。（それはあたかも、次のような言葉を真面目に聞かされるのと似ている――「私は、……だと、自分が生まれる前に信じていたことをはっきりと覚えている。」）

（c）先ほどの疑いの表明は、言語ゲームに属していない。だが感覚の表出を、つまり人間の振る舞いを、取り除いてしまうなら、私はまた疑ってもよいように見える。ここで私が、我々はその感覚を他の何かと間違うかもしれないと言いたくなるのは、次のようなわけだ。もし感覚の表出を伴う普通の言語ゲームが廃

止されたと考えるなら、その感覚が同じだと言うために、私には基準が必要となる。すると誤りの可能性もまた存在することになろう。（二八八節）

節の冒頭で、石の想定が繰り返されている。この繰り返しは、この想定が二八三節で既に片付けられたものではないことを意味している。この想定に対しヴィトゲンシュタインは（マルコム風に言えば）「意外な手を打つ。」つまり、私は本当に痛みを感じているのか、と反省する余地はないのか？と問うのである。この一手に対し、ヴィトゲンシュタインのオルター・エゴと思われる側は、痛みの自己帰属の不可謬性・不可疑性を正当にも主張する。そしてこの論点は認められ、かつ敷衍される。つまり痛みの自己帰属を疑うような人は、「痛み」の意味・使用を理解していない人、忘れてしまった人だと思われるのだ。自己帰属を疑う人は、文法違反を犯しているのだ。そして通常、そのような人に対しては、「痛み」の使用を教えたり、思い出させることができる。というのも痛みの公的基準というものが存在するからだ。

ところが（c）では、痛みの自己帰属の不可疑性が再確認された後、振る舞いが除去されれば、痛みの自己帰属は再び可疑的になりうるとされる。これは一体どういうことか？人間的振る舞いが消滅することにより、いかなる困難が生じるために、私は自分に疑いを向けることになるのというのか？まず石への変化でなく、別の形による振る舞いの消去を考えたい。全身の筋肉の麻痺が進行する筋萎縮症の病気を例にする。この病気の重度の進行状態では、もはや通常の人間的振る舞いは不可能となる。僅かに残っているまばたきを利用して、辛うじて意思疎通の可能性が残されているくらいである。が、行動的反応は消え、身体は丸太同然であるにもかかわらず、このような病気の患者は実は全身、苦痛の塊であるという。

我々はここで、自然な振る舞いを失った人が、にもかかわらず明瞭な意識を持ち、痛みを感じうることを、何の苦もなく理解するだろう。たとえ自然な痛みの振る舞いがもはや不可能になっているにせよ、この患者が自分は痛いと思っているならば、彼は痛いはずである。たとえ振る舞いが消滅しようと、「いまや痛みの自己帰属は可疑的だ」という主張ほど、本人にとって理不尽なものはないだろう。そして我々はこれを理解できるのである。つまりこのような状況では、患者は痛みの自己帰属を疑うことは強要されない。ここに困難は見出されない。

しかし仮に彼が、自発的に疑い出すとしよう――「私が感じているのが痛みなのか、何か別のものなのか、分からない。」このときには、振る舞いが消去されているがために生じる困難が、確かにある。例えば、この懐疑が次のように表されるとする。「私は他人には痛みを帰属できる。ほら、隣で呻いているあの人は、痛がっているのだ。しかし、私は自分が感じているこれが、痛みなのか分からない。」このような事態になれば、彼が痛みの自己帰属を再学習することはもはや望めない。なぜなら彼は、痛みの自己帰属の不可疑性を否定することで、痛みの自己帰属における一人称権威を放棄し

た。いまや彼は、自分に対する痛みの帰属のために、他人による権威を必要としている。ところが仮定上、他人による権威がはたらくための不可欠な足場としての痛みの自然な表出が、消滅している。したがって、ここで自己帰属に向けられた懐疑は、いったんそれが口を開けるなら、それを塞ぐ術はもはやないのである。

だが、話を元に戻すなら、自己帰属を疑うべき必要は、そもそもなかったのである。この患者が、人間的行動が消去されているという点で異常であっても、言語使用者として正常ならば、彼は痛みの自己帰属を疑うことはできないはずなのだ。なぜなら「自分が痛いのかどうか、疑うことは意味をなさない！」からである。

さてマルコムは、この箇所をどのように捉えているか？彼は、二八八節の「感覚の表出を、つまり人間の振る舞いを、取り除いてしまうなら、私はまた疑ってもよい *dürfe* ように見える」を「……私は疑うべきだと思われる（it seems that I *ought* to be in doubt）」と訳しているのである。そして、この後は「べきである」という方向に突き進む。マルコムによれば、私には疑いが強要されるのであり、その際私には自分の痛みの表明の正しさを確認するための基準（つまり振る舞い）がないのだから、自分の主観的印象と客観的事実は区別されず、よって私の言葉は無意味となる。他方、この問題を避けるために何らかの基準を新たに導入するなら、基準に照らしてのチェックの結果、自分の表明が誤りだと判明する可能性を認めることになり、これもまた受け入れがたいとされる。このジレンマのために、振る舞いが消去されたにもかかわらず痛みがあるという想定自体に問題があったことにされるのだ。マルコムの考えによれば、石の想定は、かくして一人称的観点から否定されることになる。

しかし私は、「……私はまた疑ってもよいように見える」という箇所を、マルコムより慎重に考えたい。痛みの自然な表出が消去された場合でも、必ずしも疑いを自分に向ける必要がない例、むしろ疑ってはならない例を、確認したからだ。そもそもヴィトゲンシュタインの表現自体――「……私はまた疑ってもよいように見える」――に、慎重さの気配があるのだ。つまり疑ってもよいように見えるだけで、実は疑ってはならないということだってありうるのだ。そこで、まず問題にしうるのは、感覚の表出・人間の振る舞いの消去ということで、精確に何が意味されているのか、という点である。二通りの場合が考えられる。（1）一つは、痛みの概念をいったん習得した者から、振る舞いが一切消え去ってしまう場合。これを弱い意味での振る舞いの除去と呼ぼう。（2）もう一つは、振る舞いが最初から一切消え去っているために、痛みの概念を習得することができない場合。これを強い意味での振る舞いの除去と呼ぼう。二つの場合は、振る舞いが存在しないという点で類似しているが、いつから存在しないかの点で（つまり消去が及ぶ範囲に）相違がある。

（1）について。先ほど言及した筋萎縮による振る舞いの消去は（1）に分類される。そしてこの場合、振る舞いが消滅しようと、痛みの自己帰属を疑うことは意味をなさないということは、確認済みである。振る舞いが消去されるなら心的状態の自己帰属を懐疑の対象にすべきだという考えは、ここでは適用されない。

なぜか？これに対しては理由を与えることができる。つまり、（1）のような場合では、ある意味で振る舞いは失われているが、別の意味では消去されていないのである。というのも（1）の場合、痛みの概念、痛みの自己帰属は、振る舞いを通して学習されたことを前提しているからだ。途中から振る舞いがなくなろうと、（1）において自己帰属される痛みの概念の中には、振る舞いという要素が既に含まれてる。（1）では、痛みの自己帰属の学習を振る舞いを利用して学習したという背景事実の中に、痛みの振る舞いが存在しているのだ。だからこそこれは、痛みに関する我々の普通の言語ゲームたりうる。そして自己帰属に向けられた懐疑には、それ故に意味がないのである。

（2）について。したがって、「感覚の表出を、つまり人間の振る舞いを、取り除いてしまうなら、私はまた疑ってもよい」ということがあるとすれば、ヴィトゲンシュタインは、（1）の場合でなく、最初から最後まで自然な表出が一切消去されている場合を考えている、とすべきだと思われる。

ではそのような場合、疑いの対象となる「感覚」の意味はいかなるものであり、なぜその場合、自己帰属に懐疑を向けうることになるのか。二五八節の感覚日記の議論においては、「私的直示的定義」によって定まる感覚概念の考えが言及されている。これは、振る舞い等の外的事柄を一切考慮することなしに、語に意味を付与することができるという考えであった。ヴィトゲンシュタインが二八八節（c）で念頭に置いているのは、このような形で与えられる感覚の概念であろう。そして、私的直示的定義という私的「規則」の考えを持ち出すなら、規則順守の印象と規則順守の事実を区別する基準を、必然的に自らに課すことになる（cf.二〇二節）。すると基準に照らして、私の印象が誤りであった可能性も生じる。つまり、本来無意味であるべき、自己帰属の可謬性・可疑性が、意味をなすことになる。問題はそれだけではない。なによりもまず、私的規則順守の基準がいかなるものかが全く不明なのである。本稿では、私的規則批判についてはこれ以上触れない。しかし（2）の場合が私的規則という考えにつながるなら、二八八節（c）でヴィトゲンシュタインが否定すべきなのは、この（2）なのである。

さて私が石になり私の痛みが続くという想定は、（1）と（2）のいずれの場合に属するか？（1）の方だと答えるほかない。石になる想定は、振る舞いを通し痛みの概念を既習した私に起こる出来事の想定である。そうである以上、私から振る舞いが消去されようと、私の痛みの自己帰属に対し懐疑的になるべきだという要請は、私にとって不可解なものとならざるをえない。マルコムによれば、石の想定を認めることは、振る舞いと痛さの間に概念的関係があることを否定することであった。私にはそうは思えない。振る舞いが途中でなくなる場合、振る舞いの消滅後の痛みの概念の中には、振る舞いの概念が既に混入しているからである。以上の考察をまとめて次のように言うことができよう。二八八節において、石の一人称的想定は否定されているとは言えない。否定されていると考えることは、振る舞いが途中から消滅する弱い意味での消去と、最初から

最後まで徹頭徹尾存在しない強い意味での消去とを混同することである。

3－3. マルコムによれば、私が石になろうと私の痛みが持続するという想定は、痛みと振る舞いの間の論理的関係を否定する。このため、この想定こそが否定されるべきだ、となる。しかし我々の考えでは、人間的振る舞いの失われ方には二種類あるのであり、マルコム的解釈ではこの差異が覆い隠されてしまうのである。私が「石」になる場合、考察にのぼるのは、振る舞いが存在したからこそ痛みの概念を、特にそれの自己帰属を、学習できた人間、学習してしまった人間である。そしてこのような背景の前提があるため、私が振る舞いを失おうが、私の痛みの自己帰属は私にとって意味をなさざるを得ない――こう思われた。

これを別の言葉で表現するなら、次のようになる。つまり痛みの自己帰属の学習と痛みの自己帰属の実践は同じではない。前者において私の振る舞いの存在は、私にとっても不可欠だが、後者において私の振る舞いの存在は、私にとって不要なのである。私の振る舞いは、私の考慮の埒外にあるのだ。

この点をヴィトゲンシュタインは次のように表している。「私は基準を用いて自分の感覚を同定するのでは、もちろん、ない。そうでなく、私は［ただ］同じ表明をするのだ（二九〇節）。」また次の言葉は、意図の表明に関して類似した論点を表しているが、それは感覚の表明にも通じる内容を持っている。「私が粉薬を二袋飲むつもりだと言ったのは、自分の振る舞いの観察が根拠にあったからではない（六三一節）。」さらに――「……私はかくかくの振る舞いをしているので、私は心の中で何か考えているのだ、などと言うか？――私は自分の振る舞いを観察してそう言うのではない（三五七節）。」

ところでこの三五七節には多少厄介な言葉が続いており、マルコムはそれに意義を見出している。つまり上の引用には、以下の言葉が続いているのだ。「しかし［私の自己帰属が］意味をなすのは、私がかくかくの振る舞いをするからだ。」これを痛みの例に当てはまるなら、次のような解釈が得られるかもしれない。つまり、「確かに私は自分の振る舞いを観察して、自分に痛みを帰属させるのではないが、私の痛みの表明が意味をなすのは、私が意識していようといまいと、私が同時に痛みの振る舞いを見せているからである。他方、石の場合は、私の自己帰属とは独立に、外的振る舞いが見出され得ない。だから、それは意味をなさない。」

しかしながら、筋肉麻痺のケースでは、振る舞いがない痛みの自己帰属にも意味があるように見えたのだった。また、より日常的な経験に照らしても、痛みの表明に一対一対応の形で振る舞いが随伴しているからこそ痛みの表明は意味を持つのだ、とは言い難い。振る舞いがなくとも、言葉による表明だけで十分であることが多々あるからだ。にもかかわらずヴィトゲンシュタインは、表明に意味があるのは振る舞いがあるからだと述べている。これはどう解されるべきか？おそらくそれは、個々の表明にその都度振る舞いが対応す

べきだという要求ではない。むしろそれは、私の言葉が意味をなすなら、私は大抵の場合かくかくの仕方で振る舞うものでなければならないというゆるやかな要求なのである。そしてもちろん、この意味での振る舞いは必要であり、第一それがなければ私は言葉を学習できなかったであろう。同様に筋肉麻痺の場合にも、当人の言葉が意味をなすには、ある意味で振る舞いが必要だと言えよう。だが振る舞いが失われたいま、振る舞いは一体どこに見出されるのか？おそらくは、彼の言葉の背景に、つまり彼が言語を学習したという広い文脈の中に、かくかくの振る舞いがあるのだ。

さてマルコムは、石の一人称的想定によって、痛みと振る舞いの論理的関係が否定されると危惧した。我々の考えではこれは杞憂であり、両者の概念的関係を認めつつも石の想定は可能であるように見えた。そして我々は、この想定を有効に批判する手段を見つけることはできなかった。なぜか？心的概念の自己帰属は、自分の外的な身体状態を観察することではなされないからである。つまり心的状態の自己帰属は、ある意味で、自分の外的な身体状態とは独立であるからだ。これが痛みの一人称帰属の際にはたらく論理である。そして実は、この文法を裏返せば、我々の石の想定が生じるのである。「恐ろしい痛みを感じ、それが続いている間に私は石になってしまう――という想像はできないか？まったく、自分が石になったかどうか、目を閉じていればどうして分かろう？」これは、私は自分の外的状態を観察せずに心的状態を表明するのだという意味で、心的概念の一人称帰属の論理そのものだったのである。

4. おわりに

『探究』二八三節においては、石に対する痛みの三人称帰属が否定された。二八八節においては、振る舞いが強い意味で消去されているときの痛みの一人称帰属が否定された。しかし両方の節において、ヴィトゲンシュタインが、石の想定を否定するために力を注いでいる様子は見られず、石の想定は、ある種の説得力を持って我々に向かってくるのだった。それは、この想定がある意味で、心的概念の一人称帰属の文法を体現しているからに他ならない。――以上が我々の考察の結果であった。

さてここで新たな視点を導入することで、一人称的観点に立ちつつも、石の想定の手綱を引き締めておくことが可能である。そしてこの可能性は、ヴィトゲンシュタイン自身の内に見出される。この点を示唆することで、本稿を締めくくることにしたい。

石の想定を、「私が石になる」と「私に痛みがある」の二つの命題の連言として表すなら、マルコムが格闘したのは、この連言であったと言える。しかしヴィトゲンシュタインが石の想定に対し懸念を抱くとすれば、それはマルコムよりも、基礎的な部分についての懸念にならないだろうかと思われる。つまりヴィトゲンシュタインにとってなによりもまず問題となりうるのは、連言そのものよりも、むしろそこに現れる命題の一方「私が石になる」の方でないか。あるいは「私は石である」、「私は石かもしれない」、「私は人間でない

かもしれない」――こういった命題が問題となりうる。この点に関し、『確実性について』から、ある部分を引用しよう。

「私は自分が人間であることを知っている。」この文の意味がいかに不明確であるかを見るために、その否定を考えよ。よく見積もれば、これは次のように理解しうる――「私は、自分が人間の諸器官を持っていることを知っている。」（例えば、脳。それは実際まだ誰も見たことがないものだが。）では次のような文についてはどうか――「私は、自分に脳があることを知っている」？私はこれを疑えるか？疑うための理由が私にはない！すべての事柄がそれを支持し、いかなる事柄もそれに逆らわない。にもかかわらず、手術をしてみれば私の頭蓋骨は空っぽであったということは、想像可能である。[14]

この引用では、「私は人間である」と「私には脳がある」という二つの命題が言及されている。この箇所の議論の展開上、前者は後者の布石に終わっている観もあるが、我々の関心上、「私は人間である」の方で考えるなら、この節は以下のようになっていただろう。つまり私が人間であることを疑う理由は、私にはない。ないにもかかわらず、目を開けて調べてみれば、私は人間以外のものに変わっていることは、想像可能である。言い換えれば、（手術をしてみれば私の頭蓋骨は空だったという想像は認められるという意味で、）目を開けてみれば私は石になっていたという想像も、ヴィトゲンシュタインは認めるはずなのだ。

他方、この節のポイントを一言で述べるなら、それは「疑いには根拠が要る」[15]ということである。これは、ある命題の否定の単なる想像可能性は、その命題に対する事実上の懐疑と同じではない、ということを意味する。『確実性について』では、「ここに手が一つあり、ここにもう一つある」や「地球は、私が生まれるずっと以前から存在した」といった種類の命題が主題となっている。それらはさらなる根拠付けを持たないため、その意味で「知っている」と言うことは意味をなさないが、他の命題の根拠となりうるほどに根元的であるため、疑うことも意味をなさない命題である。そしてこれらの命題のうちに、「私は石ではない」もまた含まれると思われる。つまり「私は石に変わってしまっていないか」と疑うことは、「地球は本当に、私が生まれるずっと以前から……」と疑うことが実質的意味をなさないのと同じ程度に、意味をなさない。確かに目を閉じている間に、私が石になるという事態は想像可能かもしれない。だがそれはあくまでも想像の域に留まるのみで、我々に現実的懐疑を突きつけるわけではないのである。我々は、「私は石になっているかもしれないが私の痛みは持続している」という想定は、ある意味で心的概念の自己帰属の文法を表している、という解釈を示した。だがこの想定に意味を認めることは、懐疑を引き受けることを決して意味するのではない。つまり想像可能な懐疑と実質的懐疑の混同もまた、警戒されるべきなのである。

注

(1) Wittgenstein, Ludwig, *Philosophische Untersuchungen/ Philosophical Investigations* (Oxford: Blackwell, 1953). 以後、本文での『探究』への言及は、節番号を用いて行う。

(2) 実際 Hacker の注釈によれば、二八三節ではデカルト主義と反デカルト主義の対立構造が見られるとされる。Hacker, P.M.S., *Wittgenstein: Meaning and Mind* (Oxford: Blackwell, 1990), p.174.

(3) デカルト『方法序説』野田又夫訳（『デカルト』世界の名著27）（中央公論社、1978年）、189頁.

(4) Malcolm, Norman, "Turning to Stone", in von Wright,G.H. (ed.), *Wittgensteinian Themes: Essays 1978-1989* (Ithaca: Cornell University Press, 1995), pp.133-44, (originally published in *Philosophical Investigations*, 12 (1989), pp.101-11).

(5) *Op. cit.*, p.134.

(6) *Op. cit.*, p.135.

(7) *Op. cit.*, p.141.

(8) *Op. cit.*, p.140.

(9) *Op. cit.*, pp.141-3.

(10) *Op. cit.*, p.143.

(11) *Op. cit.*, p.141.

(12) Cf. Hacker, *Wittgenstein: Meaning and Mind*, p.174.

(13) 人間のように振る舞うものについてのみ「痛みがある」と言えるという二八一節および二八三節（e）の論理は、以下の理由により、一人称的な痛みの帰属の論理とは異なる。（1）一人称帰属においては自分が人間のように振る舞っているか否かは考慮されない。この点については本稿でも、後に本文で触れる。（2）痛みの自己帰属では、何かについて痛みがあると言われるのではない。ヴィトゲンシュタインによれば、「私は痛い」の「私」は指示表現ではないからだ。つまり痛みの自己帰属は「痛い！」だけで十分なのである。この点に関しては、『探究』四〇四節以下を参照のこと。

(14) Wittgenstein, Ludwig, *Über Gewissheit/ On Certainty* (Oxford: Blackwell, 1969), §4.

(15) *Op. cit.*, §122.

Turning to Stone, *Philosophical Investigations* § 283 & § 288

Ken MARUTA

Philosophical Investigations § 283 contains the following supposition: "Couldn't I imagine having frightful pains and turning to stone while they lasted? Well, how do I know, if I shut my eyes, whether I have not turned into a stone?" According to Norman Malcolm, this supposition represents the negation of the logical relation that exists between our concept of pain and its natural expressions, and it thus needs refutation. Because the self-ascription of pain is not based on the observation of one's own behaviour, Malcolm thinks that, from the first-person perspective, the supposition cannot be dismissed on the ground that a stone does not satisfy behavioural criteria. However, Malcolm believes that Wittgenstein succeeds in rebutting the supposition by another means. The aim of this article is to examine Malcolm's argument by taking into account the relevant remarks of *Investigations.* The following points will be made: (1) to regard the supposition as refuted at § 283 is to confound first-person ascription of pain with third-person ascription of pain; (2) to regard the supposition as refuted at § 288 is to confound the elimination of pain-behaviour in the stronger sense with that in the weaker sense; (3) to regard the supposition as refuted at all in *Investigations* is to confound the learning of self-attribution of pain with the practice of self-attribution. In the final analysis, Wittgenstein's concern did not lie in confuting the supposition of "turning to stone" as Malcolm would like us to believe. Rather, the supposition appeals to us because it actually captures the logic of the first-person ascription of mental concepts.

Keywords

Wittgenstein
Malcolm
first- and third-person
psychological concepts
behaviour